

美しいユーラリ フランス

昔むかし、ジャンという若者がいました。ジャンは兵隊のつとめを終えて、国へ帰ろうと、旅をしていました。

ある晩、ジャンは、一軒の家の戸をたたきました。すると、美しい娘が出てきて、「あなたを泊めることはできません。わたしの父は人食いじじいなのです。父が帰つて来たら、あなたは食べられてしまいます」といいました。ジャンは、「かまうもんですか。わたしはつかれてたおれそうです」といいました。娘は、「ではしかたがありません。父が、帰つて来たら、うまくやってみましょう。わたしは美しいユーラリです」といって、ジャンを中に入れてくれました。しばらくすると、人食いじじいが帰つてきました。人食いじじいは、大きな目をむいていました。

「生肉のにおいがするぞ。人間の肉のにおいだ」

美しいユーラリは、

「つかれた兵隊さんが、休ませてほしいといってやつて來たの」といいました。人

食いじじいは、

「あしたの昼飯に食べるとするか」といって、寝てしまいました。

つぎの朝、美しいユーラリは、人食いじじいにいいました。

「あの人を食べるのは、お父さんの手伝いをさせてからでも遅くはないわ」

そこで、人食いじじいは、ジャンにむかつていいました。

「わしが出かけているあいだに、だんろのまき置き台と、鉄の棒と、自在鉤をみがいて、銀のようにピカピカに光らせるんだ。みがく道具はおまえのつめの先だけだ。夕方までにやつてしまわないと、あしたおまえを食うからな」

そして、人食いじじいは出かけて行きました。

だんろのまき置台と鉄の棒と自在鉤は、五百年もの間みがいていなかつたので、さびとすとほこりだらけでした。ジャンは、とほうに暮れて、

「これを爪の先だけでみがくなんて、とてもできやしない」といいました。すると、美しいユーラリはいました。

「わたしをここから連れ出して、結婚するつて約束してくださる? そうすれば、わたしがあなたに代わつて仕事をかたづけてあげるわ」

「ああ、約束する」と、ジャンはいました。

日が暮れるころ、美しいユーラリはだんろにむかつていいました。

「つえの力により、父の命令が果たされるように」

たちまち、まき置台も鉄の棒も自在鉤も、銀のようにかがやき始めました。

人食いじじいは、帰つてくると、ぴかぴかのだんろを見ていました。

「やあ、よく働いたな」

あくる朝、人食いじじいは、

「わしが出かけているあいだに、わしの馬具をみがいて、金のようにピカピカに光らせるんだ。夕方までにやつてしまわないと、あしたおまえを食うからな」といつて、出かけて行きました。

ジャンがとほうに暮れていると、美しいユーラリがいました。

「わたしをここから連れ出して、結婚するつて約束してくださる？ そうすれば、わたしがあなたに代わつて仕事をかたづけてあげるわ」

「ああ、約束する」

日が暮れるころ、美しいユーラリは馬具にむかっていいました。

「つえの力により、父の命令が果たされるように」

たちまち、馬具は、金のようにながやき始めました。

人食いじじいは、帰つてくると、ぴかぴかの馬具を見ていいました。

「やあ、よく働いたな。あしたも働いてもらうぞ」

その晩、美しいユーラリは、ジャンにいいました。

「ぐずぐずしてはいられないわ。急いで逃げだしましよう」

ところが、そのとき、となりの部屋で寝ていたおかみさんが、

「夢を見たよ」とさけびました。人食いじじいは、

「どんな夢だ」ととききました。

「ユーラリとジャンが逃げようとしている」と、おかみさんがいいました。人食い

じじいは、ユーラリの部屋にむかつて、

「美しいユーラリ！」とよびました。ユーラリが、

「なあに、お父さん」と答えると、人食いじじいは、こんどは、

「きたないジャン！」とよびました。ジャンは、

「何ですか。ご主人」と答えました。人食いじじいはおかみさんに、

「ほら、ふたりともベッドにいるよ」といいました。

美しいユーラリは、パイをふたつ焼いて、ベッドの上に並べました。それから、ふたりは、逃げ出しました。

しばらくすると、おかみさんが、また、「夢を見たよ」とさけびました。

「どんな夢だ」

「ジャンのやつがユーラリを連れて、もう遠くに行つてしまつた」

人食いじじいは、

「美しいユーラリ！」とよびました。すると、パイのひとつが、

「なあに、お父さん」と答えました。

「きたないジャン！」とよぶと、もうひとつのパイが、

「何ですか。ご主人」と答えました。人食いじじいはおかみさんに、

「ほら、ふたりともベッドにいるよ。わしらも眠ろう」といいました。

ところが、しばらくすると、またおかみさんが、

「夢を見たよ」とさげびました。人食いじじいは、

「美しいユーラリ！」とよびました。けれども返事がありません。こんどは、

「きたないジャン！」とよびました。やっぱり返事がありません。

「もう眠つちまつたんだ」と人食いじじいがいうと、おかみさんが、

「いいや、出て行つたんだ。起きてふたりを追いかけおくれ」といました。

人食いじじいが、となりの部屋をのぞくと、ベッドはからっぽでした。じじいは

馬に乗つてふたりを追いかけました。

美しいユーラリとジャンは、走りに走りました。ユーラリがいいました。

「わたしのジャン、何かやつて来るのが見えない？」

「馬に乗つて走つてくる人が見える」と、ジャンがいようと、ユーラリはいいました。

「お父さんだわ。つえの力により、あなたはなしの木になるなしの実に、わたしは

なしの実をもぐおばあさんに！」

たちまち、ジャンはなしの実に、ユーラリはおばあさんになりました。そこへ、

人食いじじいが、馬をとばしてやつて来て、

「ばあさん、ここを娘と若者が通らなかつたかい」ととききました。おばあさんは、

「そうだね。このなしの実をもぐのはひとくろうだよ」といいました。

「そうじやない。ここを娘と若者が通らなかつたかときいてるんだ」

「そのとおり。このなしはおいしいよ」

人食いじじいは、腹を立ててもどつて行きました。

おかみさんは、じじいに、

「見つけたかい」ととききました。

「いいや。なしの木があつて、なしの実をもいでいるばあさんに会つただけだ」

「ばかだね。そのなしの実がジャンで、ばあさんがユーラリだよ」

「ようし、もういちど行つて来る。こんどは逃がしやしない」

人食いじじいは、馬に乗つてかけだしました。

美しいユーラリは、ジャンにいました。

「わたしのジャン、何かやつて来るのが見えない？」

「馬に乗つて走つてくる人が見える」

「お父さんだわ。つえの力により、わたしは、ばらの木に咲くバラの花に、あなた

は庭師になるように！」

たちまち、ユーラリはばらの花に、ジャンは庭師になりました。そこへ、人食い

じじいが、馬をとばしてやつて来て、

「おい庭師、ここを娘と若者が通らなかつたかい」ととききました。庭師は、

「いいや、玉ねぎの種は売らないよ」といいました。

「そうじやない。ここを娘と若者が通らなかつたかときいてるんだ」

「ああ、にんじんの種なら売るよ」

人食いじじいは、腹を立ててもどつて行きました。

おかみさんは、じじいに、

「さあそれで、ふたりを見つけたかい」ととききました。

「いいや。バラの花があつて、庭師に会つただけだ」

「ばかだね。そのばらの花がユーラリで、庭師がジャンだよ。こんどはわたしが行つてつかまえてくる」

おかみさんは、馬車に乗つて追いかけました。

美しいユーラリは、ジャンにいいました。

「わたしのジャン、何かやつて来るのが見えない？」

「馬車が来る、とんでくる、とんでくる」

「じやあ、こんどはお母さんよ。つえの力により、あなたは池に、わたしはあひるになるように！」

たちまち、ジャンは池になり、ユーラリはあひるになつて池に浮かびました。そこへ、おかみさんが、やつて来て、パンをちぎつて投げながらいいました。

「きれいなあひるさん、こっちへおいで」

あひるは近付いてきて、パンをつまんでさつと逃げました。おかみさんは、まほうのつえをふり上げて、あひるの背中を打とうとしました。そのとき、あひるはつえをくわえたかと思うと、おかみさんの手からもぎ取つて、水にもぐつてしましました。おかみさんは、つえをなくして、まほうの力を失つてしましました。

「美しいユーラリ、つえを返しておくれ！」

おかみさんはさけびましたが、どうにもなりません。泣きわめきながら帰つて行きました。

ふたりは、ジャンの国に向かいました。家の近くまで來たところで、ジャンはいいました。

「親たちを驚かせないように、ぼくが先に帰つて、あなたが來ることを知らせよう」美しいユーラリは、

「ええ、いいわ。でも、家に着いたら、だれにもキスさせないと約束してね。だれかがキスしたら、あなたはわたしをわすれてしまうから」といいました。

ジャンが家に帰り着くと、親たちは大喜びしました。

ジャンは、疲れていたので少し横になりました。すると、母親がそつと近づいて、キスしました。そのとたん、ジャンは、美しいユーラリをわすれていきました。ユーラリが家にやつて來ても、ジャンは思い出すことができませんでした。

美しいユーラリは、あきらめて、村はずれの小さな家で、ひとり暮らすことになりました。

さて、この国の領主には、息子が三人いました。息子たちは、窓辺に立つ美しいユーラリを見つけ、妻にしたいと思いました。

ある晩、上の息子が、ユーラリの所へ結婚を申しこみにやつて來ました。いくら断つても上の息子があきらめないので、ユーラリは、いいました。

「じゃあ、だんろの火種を灰の中に埋めてくださいな」

上の息子が、火種を埋めにかかると、ユーラリは、つえをつかんでいいました。

「おまえは、火を埋め

火を起こし

ひと晩じゅうやつてているように」

ユーラリが、寝室で眠っているあいだ、上の息子は台所で、ひと晩じゅう、火種を埋めたり起こしたりしていました。そして、夜が明けると、がつかりして帰つて行きました。

そして、こんどは、二番目の息子が、ユーラリの所に結婚を申しこみにやつて來ました。ユーラリは、「まどから雨が入らないように、まどガラスを開めてくださいな」といいました。

息子がまどを閉めにかかると、ユーラリは、つえをつかんでいいました。

「おまえは、まどを閉め

まどを開け

ひと晩じゅうやつてているように」

ユーラリが、眠つているあいだ、息子は、雨でずぶぬれになりながら、ひと晩じゅう、まどを閉めたり開けたりしていました。

つぎの晩、三番目の息子が、結婚を申しこみにやつて来ました。息子があきらめないので、ユーラリはいいました。

「じゃあ、とびらにかんぬきをかけてくださいな」

そして、つえをつかんでいいました。

「おまえは、かんぬきをかけ

かんぬきをはずし

ひと晩じゅうやつてているように」

ユーラリが、眠つてているあいだ、息子は、ひと晩じゅう、かんぬきをかけたりはずしたりしていました。

三番目の息子ががつかりして家に帰ると、兄さんたちが、

「うまくいったかい」とたずねました。

「どんでもない。ひと晩じゅう、とびらのかんぬきをかけたりはずしたりしていたんだ」

三番目の息子が答えると、兄さんたちもいいました。

「ぼくは、ひと晩じゅう、まどを閉めたり開けたりしてたんだ」

「ぼくは、ひと晩じゅう、火種を埋めたり起こしたりしてたんだ」

三人は、こんなひどい目に合わせたユーラリに、仕返しをしようと相談しました。

しばらくすると、ジャンが村の娘と結婚することになり、三人の息子たちも招待されました。そこで、三人は、仕返しのチャンスだと思って、美しいユーラリを結婚式にまねくよう、ジャンにすすめました。

結婚式の日、やつて来た美しいユーラリは、おひさまのようにかがやいていました。ユーラリは、ジャンのとなりにすわると、持つて来たパイをふたつ、テーブルにならべました。パイは小さな声で話し始めました。

「わたしのジャン、あなたがとても疲れていたとき、泊めてあげたお父さんの家のことを覚えている?」

「いいや、覚えていない」

「わたしのジャン、あなたがみがくようにいいつかって、わたしが銀のようにもみがいてあげただんろのまき置台と鉄の棒と自在鉤を覚えている?」

「いいや、覚えていない」

「わたしのジャン、わたしたちが逃げ出して、あぶない目にあつたことを覚えている?」

「いいや、覚えていない」

「だれにもキスさせてはダメつていつたことも覚えていないの?」

「思い出した!美しいユーラリ。思い出したよ」

ジャンはすぐに立ち上がり、母親にたずねました。

「ぼくは、戸棚のかぎをなくして、新しいかぎを作つてもらいました。ところが、そのあとで、古いかぎを見つけました。ぼくはどちらのかぎを使えばいいでしよう」

すると、母親は、

「古いかぎですよ。よくなじんでいるから」と答えました。そこで、ジャンはいました。

「ぼくは、ぼくの命を救つてくれたこの美しいユーラリと結婚の約束をしていました。いちど見失つて、今まで会うことができました。ぼくは、ユーラリと結婚しなくてはなりません」

こうして、美しいユーラリとジャンは結婚しました。お祝いは七日七晩続きました。

みんながおどつた、老いも若きも

八十五歳で

子やぎのようにはねまわる  
バルビション母さんにいたるまで

村上郁再話

資料『世界の昔ばなし9フランス 美しいユーラリ』新倉朗子編訳／小峰書店